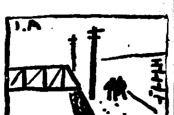
勞働組合幹部論 (二)



我國の特殊事情

英國の勞働組合は、產業革命前からの共濟的徒弟組合にその源を發し、嚴密な組織的意味では、言ひ難いかも知れぬが少くとも、習性、氣風等に於いては、その傳統を繼承して居ると言つて差支へないものである。英國のみでなく、歐洲の先進諸國の勞働組合は、多少國に依つて趣きを異にして居ても概ね共濟組合的團結の傳統を傳へて居るのである。ところが、我國の勞働組合は、全然夫れが無い。鍛冶、大工、佐官、石工等の所謂封建時代からの職人の間には、共濟的組合の存在したことも認められるが、何等その習性も傳統も現時の勞働組合に傳へられて居らない。同じ共濟的組合と言つても、諸外國の夫れは、相當組織的であり、且つ時に依つては、雇主との間に團體協約的役割を務めた形跡も見受けられたのであるが、我國に於てはまるきりそれがなく、[illegible]在する勞働者の間にも、英國の「渡り職人救濟組合」に似た組織があつた樣であるけれども、矢張り、これが必然的に、全國的職工組合に變形し得る程のものでなかつた。斯くの如くに、現存せる我國勞働組合は、職人組合、共濟組合等の組織的、精神的遺產を承け繼いで居らないのであつて、これが我國勞働組合の第一の特色である。

職工組合の歷史が無い

勞働者團結の最初は、先づ同一職業から起きたことは一般的な事實である同職意識は階級意識よりも强いことは否み難い。同職間の共通した利害、儀禮、習慣、言語といふものが、どんなに、職工組合の團結を援けたかは言ふ迄もないところだ。殊に、見習期間の長い熟練職工は、その職業に對する愛着勞働條件の向上に就ても、一層の熱心を有することは當然であつて、こゝに職工組合の强固な聯帶觀念が培はれたのであつた。[illegible]合は、共濟組合の傳統と共に、この職工組合の歷史を相當永く繼續して來た一世紀半にも亘る歷史を有する英國勞働組合が、今尚、產業別整理問題に惱まされて居るのであつて、職工組合時代をまだ脫け切つて居らない有樣である。然るに、我國の勞働組合は、職工組合の歷史を殆んど持つて居らない。我國產業の中で、最も早く機械化されたものは纖維工業特に棉糸紡績と生糸業であるが、熟練を要しない粗工業である爲この從業員の大多數は、幼弱な婦人勞働者であり、移動劇しく、職業の轉換亦容易であり、且つ獨立の生計者でない結果、職工組合の發生する事情は少しも認める事が出來ないのである。機械工業中先づ造船業が早く近代化されたが、それすらも、全產業から見れば言ふに足りず、其他の機械工業も稍々見るべき狀態に至つたのは明治三十七八年日露戰役以後の事である。これは職工の熟練を必要とし新しい職人階級が發生した爲に、職工組合の運動は、明治卅三年頃から現はれたが、遂にモノにならずに終つたこの點は後で述べることにしよう。

化學工業はマッチ工業に始まつた。內職仕これは工場生產といふよりも、[illegible]肥料、工業藥品工業等も、大規模化されたのは最近であり、且つ餘り熟練を要しない爲め、固定した職人階級が發生せず、職工組合の生れる筈もない、製鐵、製銅の如き金屬產業も貧弱にしく、技術充分ならざる爲め、その發達最も遲れ、明治三十三年八幡製鐵所創立以來、稍々見るべき狀態となつた。製銅產業の如きも、歐洲大戰前迄は、銅塊の儘輸出して居た有樣で、共に熟練職工を必要としない。要するに、我國の大產業は、相當發達したものを西洋より移植せるもので、我國固有の傳統を基礎に有するものは殆んどないのである。而も、その始めは粗工業から出發した結果、熟練職工階級を發生せしめなかつた。最近、漸時精工業に轉じつゝあるけれども、それは極度に發達した機械の應用によつて、所謂「產業の合理化」が行はれた爲め、矢張り熟練工を必要としないのである。この熟練職工の勢力の我產業上に占む地位は極めて低く職工組合の歷史が我國勞働組合史中に、殆んど見受けることの出來ない事が、第二の特色である。

鐵工の組合運動

先きにも一言した樣に、我國の勞働[illegible]明治

廿年の頃、慶應年間からの西洋鐵工たりし小澤辨藏なる人が、職工組合の必用を感じて運動を起し、同年二月廿四日、東京兩國の井生村樓に於て第一回の相談會を開いたところ、會の半にして博奕が始まり、何の打合せも出來ず散會後は連れ立つて遊廓に繰り込むといふ醜態を演じ失敗に終つた。以て當時の氣風が分かる。

明治廿二年になつて、小澤氏等の努力漸く報はれ、同年六月、石川島造船所、陸軍造兵廠、田中機械製造所、鐵道局等に從事する鐵工を糾合し「同盟進工組」と稱する組合をつくつた。この規約を見ると、第一條に「當組合は機關部職工(旋盤、鑢鑿、製罐、煉鐵、木形、鑄物師)を以て組織す」とあり、第三條に「當組合は各工場主と約束を結び、雇主被雇人との關係を調理し兩者の便役を謀る」とあつて、團體協約と勞資協調を目的とし、第七條に「當組合は漸時規模を擴張し、積立金額凡そ一萬圓に達するを程度とし、一の工場を設け、職工志願者の技術練習所となし、又組合員の被雇工場休工中の工場に供す」と規定して、仲々用意周到なる態度を示して居る。こゝは確かに職工組合としての資格を有する組合であつたが、惜しいことに、前記工場中で積立金を費消したといふ風說が立ちその結果、幾月を經たず積立金を分配して解散して終つた。當時の職工が如何に幼稚であつたかゞ分かるのである

其後、明治卅年四月、職工義友會なるものが設立された。これは米國に於て勞働しつゝあつた城常太郎、澤田半之助兩氏が歸朝して組織したものであつた。米國勞働總同盟の運動に倣つたものであつて、純然たる職工組合主義に基くものであつた。この義友會が肝入りとなつて、明治卅年七月勞働組合期成會が組織された。この期成會に加入した鐵工千百八十四人は鐵工組合を組織したが、明治卅二年九月には五千四百人の組合員を有し、東京及近縣の大工場を網羅するに至つた。ところが明治卅三年になつて早くも衰退の兆が現はれ、卅四年になつて遂に解散する結果になつたのである。

日本の勞働組合運動が、先熟練工の多數を擁する鐵工の間に起きたことは興味あることであるが、然し、彼等の間から眞に組合を指導し得る幹部を充分推出せしむることは出來なかつた。この鐵工組合運動にしても、高野房太郎(新聞記者)片山潜(同)佐久間貞一(印刷會社々長)島田三郎(政治家)鈴木純一郎(敎師)等の直接間接の指導援助を受け、片山、高野氏の如きはその庶務部長であつた。勞働者の自覺足らずその中から立派な幹部を出すことの出來なかつた未熟な狀態が、鐵工組合を僅々三四年で滅亡せしめた最大事情を語るものであると言はねばならぬ。

其他の組合運動

鐵工組合以外には、日本鐵道の機關手が、明治卅一年矯正會を組織し、卅二年には組合員一千名、二萬圓の積立金を有するに至り、强固なる基礎を持つたが、次第に猛烈なる壓迫を蒙り、遂に幾何もなくして潰滅したのである

右の外活版工の間にも、組合運動が起り、明治卅一年三月、活版同志會が組織されたが、會社の壓迫を受けて解散し、更に同年懇話會と稱する組合をつくり、會勢益々增加したので、資本家も壓迫の態度を止めた。依つて卅二年五月島田三郎氏を會長に推し、後に活版工組合と改稱して組合員二千名に上つた。その役員の顏振れを見ると、會長島田三郎、名譽役員に石黑忠悳、加藤弘之、片山潜、高野房太郎、村井知至、桑田熊藏、松村介石の諸氏の名がある。然しこれも卅三年に入つて衰退し、解散の止むなきに至つた。

活版工組合の外には、明治廿九年組織された東京船大工組合が在り、明治三十年ストライキで勝利を得て會員增加し、六百四十名に上つたが、これも明治三十二年になつて解散してしまつたのである。

明治卅三年、治安警察法發布されて勞働組合に對する壓迫益々加はり、日清戰後最初の不景氣襲來した爲め、勞働組合運動は漸時衰退し、殊に、明治四十三年の大逆事件以來は全く影を見留めることが出來ない有樣となつた。

以上の如く明治時代の組合運動は、二三の產業に於て職工組合の萠芽が現はれたけれども、盡く大成しなかつた。この時代に於ける組合は熟練工を對照とするものであつたけれども、職工自身の中から、組合を指導する幹部が出でず、出でゝも甚だ少く、多くは外部の智識階級、名士の指導援助を受けた。その結果、職工組合主義に徹底出來ず、多分に政治的思想的色彩を帶つ様になつたことが、その大成しなつた一原因である。何れの國でも、職工組合時代に入つた當初には、勞働者以外の指導者を必要としたことは、共通の事實であるが、特に我國ではそれが甚だしかつた樣である。さて以上の特殊事情は組合幹部にどんな影響を與へたであらうか。(以下次號)